

釜石の歴史

よもやま話

10

釜石の鉄学編(6)

問い合わせ

市世界遺産課 22-8846

釜石鉄山田中製鐵所の歴史(2)

釜石鉄山田中製鐵所の発足

明治16(1883)年正式に廃山が決定した釜石鉄山では10月に残務掛を置き、払い下げ業務が始まりました。鉄道は藤田伝三郎らが払い下げを受けた。静岡県出身で東京の商人の「鉄屋」阪堺鉄道(現南海鉄道)へ、鉱石などは浅野総一郎らが払い下げを受けました。田中長兵衛もこの払い下げに参加し、代理として横須賀支店長の横山久太郎が釜石に派遣されました。

横山は誰も払い下げを受けない木炭に目をつけ、明治17(1884)年3月に大量に購入しましたが、その頃は運送費が高い割に相場が安く、大損をしてしまいました。

そこで、釜石に残してあった木炭と鉱石を使い、敷地千坪を借り受け、明治18(1885)年から製鉄をすることとしました。文献では、横山が進言して、とありますが、当時、長兵衛の息子安太郎(のちの2代目長兵衛)もドイツに留学していた大河平才蔵に学んだり、出雲地方への視察を行っていましたから、社を挙げて製鉄に取り組もうとしていたようです。

官営製鉄所の技術者から高炉操業主任に高橋亦助、機械整備主任に村井源人(兵衛)の地元出身者を雇い入れ、3トン程度の小高炉を建設し、操業に挑戦していました。



49回目にして出銘に成功した高炉

まました。ファイゴが送る風を暖風にする熱風炉に改良したり、原料の配合比や送風量、炉内径の変更などの工夫を重ねましたが、数十回の失敗を繰り返しました。それでも諦めずさらなる改良・改善を加えて何回も挑戦しましたがうまくいかず、責任を問われた横山はついに明治19(1886)年4月、高橋に後を託して東京へ戻されます。残された高橋らはさらなる努力を重ね、明治19年10月16日、高炉吹入れ49回目で連續出銘に成功しました。この成功を受け明治20(1887)年には官営時代の敷地や諸建物の払い下げを受け、釜石鉄山田中製鐵所を創業しました。

一方、官営時代の高炉2基は、廃業後そのままの状態でした。そこで、田中は農商務省技師で帝国大学採鉱冶金科教授の野呂景義とその弟子で農商務省技師試補であった香村小録にその改修を依頼し、明治27(1894)年、改修に成功しました。

改修した炉は25トン高炉から30トンになつただけでなく、日本で初めて木炭に代わってコークスを用いて製鍊したことで出銘量が飛躍的に増加しました。この年、釜石銘の生産量が初めて中国地方の砂鉄銘を超えました。

コークス高炉成功記念として、初の銘鉄(初湯)で鋳造した山神社扁額(市指定文化財)は釜石製鐵所山神社(桜木町)の鳥居に掛けられています。「山神」の文字は香村が揮毫(きこ)しています。釜石での成功は官営八幡製鐵所建設のきっかけの一つとなり、初代技監には大島高任の長男道太郎がつき、明治34(1901)年操業を開始します。当初はうまくいかなかったものの、嘱託顧問として野呂が指導し、日本最大にして日本初の銘鋼一貫体制の製鐵所として本格始動します。なお、野呂の改修には釜石の技師と8名の熟練職工が派遣されています。釜石製鐵所も明治36(1903)年、民間初の銘鋼一貫体制を確立します。

横山久太郎



横山久太郎